

現代社会から見たいじめの対策・原因

本論文では、いじめ問題の事例を参考に児童間でいじめが起こりうる環境にいる人にいじめの判断材料となる指標を示し明瞭化することや、いじめの発生件数を減らすために原因を考察することや解決策を提示することが目的である。

第1章では、実際のいじめ問題の事例を取り上げ、それぞれのいじめを考察し少年犯罪の違いを確認した。いじめの事例は、すべてにおいて少年犯罪と呼ばれるような重大な事件であることを示した。第2章では、いじめをグループ化し、さらに深刻ないじめとそうでない事例を学校犯罪として分類した。いじめという概念が広い範囲の意味を持っていることがわかり、教員の介入による解決を目指すべき事例と警察が介入するべき事例を具体化するために一つの指標を示した。第3章では、いじめと学校犯罪という分類を周知させるためにわかりやすく言い換えることや、いじめという言葉の世間のイメージを考察し、日本の教育機関におけるクラス制の問題点を考察した。第4章では、尊厳を獲得することが困難となった現代社会を生きる子どもが規則がなくともいじめの事実を隠すことがなく解決できるように現在の教育機関の問題点や保護者の存在が子どもにとって頼れる存在であるべきであることを示した。

これらの考察を通して、現代社会に求められるいじめ問題を解決するための結論を3つ以下に述べる。

1つ目は、規則功利主義的な視点で、いじめの中にも深刻な問題と比較的深刻でない問題があり、その2つは区別されるべきであり、対応も変えるべきであるという意識をいじめ問題に関わるすべての人が持つべきである。特に日本のいじめ問題でよく指摘される問題として、見て見ぬふりが発生するということがあり、これを解決するためにはしっかりと場合分けすることが重要になるのである。2つ目は、クラス制に縛られることなく、柔軟に変更をすることができるようにするべきである。いじめを受けたとしてもその加害者が同じクラスのメンバーだった場合に学校で必ず同じ時を過ごさなければならないことは学習面、精神的にも悪影響を及ぼすことが考えられる。だからこそ、柔軟にクラスを変更するような制度を作ること、または大学のようにクラスをなくすことでその可能性を低下できると考える。3つ目は、尊厳を安定して得ることができなくなった現代では、教育機関の教育方針を現代に合った様式に変化させるべきであり、最低限保護者をはじめとする大人が適切な対応をとる必要がある。教育機関はクラス制や校則の見直しなど、「みんな仲よし」とは対極にある多様性や個性を尊重する教育に転換するべきである。尊厳が十分に得られずに子どもは自分に自信を持てなくなっている。だからこそ、自分は信じられなくても保護者に相談することで自分が正しいかどうかを参考にできるような関係を築く努力をするべきである。